

リビング ギター

2.



著・イラストレーション

エイジ

エピソード3 目標の場所

自宅近辺の繁華街をあてもなくブラブラしているレイとチャコ。草葉の陰の世界を見る事ができるようになつたレイにとつて、普段見慣れたこの街の風景に溶け込んでいる幽霊たちの様子を観察するのはとても興味深かつた。人間観察ならず、幽霊観察というやつだ。

幽霊たちは建物や車、人などのあらゆる対象物をすり抜けて自由に歩いていた。変わつたヤツの中には、地上数メートルあたりをのんきそうにふわふわ浮かんでいる者や、可愛い女の子をニヤニヤしながら見つめている者、信号機の上にちょこんと座り、足下を走り抜けていく車の列をボーッ眺めている者、それぞれの幽霊たちが自由気ままに、それぞれの個性に応じたゴーストライフを楽しんでいるようだ。

一般的にレイ達の生者の世界でいう草葉の陰というのはお墓の下を意味し、じつとりと湿度が高く、暗いイメージの言葉だったが、あの世の住民達の呼ぶそれは何ともお気楽でのんびりした世界のようだ。

それぞれの幽霊は何らかの目的や理由があつてこの世界にとどまつてているということらしいが、今レイの目の前で好きなように行動している幽霊達を見ていると、案外深い理由や因縁などは無いのではないかと思えてくる。そんな風に思わせる妙に楽しげな雰囲気がそこにはあつた。

そうして、小一時間チャコと街をブラブラしていたレイは、本来の目的……そう、バンドメンバー探しという大事な用を思い出した。

「ねえ、チャコ、ところでメンバー探しは……」

レイはチャコに途中まで話しかけたところで、あわてて口をつぐんだ。周囲の人たちが少しひっくりしてレイを不思議そうな目で見たからだ。

——そつか、周りの人にはチャコがみえないんだつけ。じゃあどうやってチャコに話しかけたらいいんだろ?——

レイが困った表情を浮かべているのを見かねてチャコが話しかけてきた。

「声に出さなくてもいいから頭の中で話しかけてみて」

レイの頭の中に直接チャコの声が響いた。レイが声に反応してチャコの顔を急いで見ると、

今話しかけてきたその口は全く動いていなかつた。そして、チャコは笑顔を浮かべながらその口を動かさないまま言葉を続けた。

「あたしらはね、別に喋らなくても会話出来るんだよ。うん……簡単に言うとテレパシーとかそういうやつかな、レイもやってみて。簡単だから」

そんなこと急に言われたってそんなものいきなり出来る訳ない。

昨夜チャコが化け猫になつて現れて、翌日には幽霊だらけの街を見て、そしてお次はテレパシーときたもんだ。年末恒例世界の超常現象3時間スペシャル番組じやないんだから、いくらなんでもこんな短時間の中でちょっと詰め込み過ぎだ。

——んなもん、急に出来る訳ないじゃん。無茶言うなよ——

そう、考えた瞬間、チャコが即座に返答した。

——うん、それでいいよ。出来たじやん——

レイはあっけにとられてキヨトンとした表情を浮かべた。

——えつ、今の聞こえたの?——

——大丈夫。ちゃんと聞こてるよ。簡単だろ?——

なんてことだろう、ちよつと頭の中でチャコに文句を言つただけなのに、無意識のうちにチャ

コに考へている事が伝わつてしまつていたようだ。こんな状態じやへタなことを頭の中で考へてられない。レイはこのプライバシーのない状況に焦りを感じた。

——ねえ、チャコ、あたしが頭の中で考へている事つて、全部チャコにわかつちゃつたりするわけ? ——

レイは一番心配なことを覚えたてのテレパシーでストレートに聞いてみた。

——考へている事はわかんないよ。普通の会話と同じで相手に話しかけるような感じで、伝えたいと思わなきや聞こえないよ。あつ、あのコかわいくない?——

チャコは道路脇の植栽の間をそそくさと走り抜けて行く白い野良猫を目で追いながら適当なノリで答えた。

——ふうん、そうなんだ。じゃあ、変に緊張しないで普通にしていればいいんだよね?——

レイはすでに安心出来る答えを聞けたにも関わらず、念を押すようにもう一度チャコに言葉を送つた。

——そう、そう。普通でいいんだよ。普通で——

チャコは先ほどの白い野良猫を完全に見失つたようで、少し残念そうな顔をしながらレイに答えた。

——口を動かさずに会話出来るつて、前に深夜アニメで見たナントカ機動隊みたいで、なんだかカッコイイな——

そう考えた瞬間、レイはあわててチャコを見たが、チャコの言う通り話しかけた思い以外は伝わっていないようだ。まあ、これで心の中のプライベートはひとまず安心だ。

——そうだチャコ、素朴な疑問なんだけど、バンド組んだあとって、どこで演奏するの？……つてゆうか、だれに聞かせるの？　たしか幽霊のメンバーは生きている人には見えないんだよね？——

レイはふと浮かんだ疑問をチャコにぶつけてみた。普通のバンドでは全く考える必要の無い問題が、今これから産まれようとしている自分たちのバンドには山積しているのだ。

まず、幽霊のメンバー探し、こればっかりはレイにはどうしようもない、幽霊に友達もいなければ知り合いもいないからだ。いきあたりばったりにその辺にいる幽霊に話しかけてヤバイ事になつたりするのはゴメンだ。次に演奏場所と聴衆だ。自分以外のメンバーは生きている人間には見えないから、こっちの世界ではアカペラで歌うレイがステージ上で一人ポツンといふ恐ろしく痛々しい絵を目にする事になる。そんなのは絶対にカンベンしてほしい。

——演奏場所は心配しなくていいよ。　レイから見たあっちの世界にも、ライブハウスやホー



ルがあつてね、みんなそこで演奏をしてるんだよ。結構デカイ規模のからちつこいのまでいろいろあるよ。――

生きている人間のレイからすれば興味津々などんでもない話をチャコは自分の首筋を右前足もしくは、右手と思われる部位の先端にある鋭い爪で猫っぽくバリバリ搔きながら答えた。

――えつ、ウソ！ あつちにもライブハウスとかあるの？ すつごい行つてみたい！――

――あるよ。みんなちつちやいハコから地道に初めて、人気が出て来たら、どんどん大きめのハコに移動して人気絶頂に達して最後に行き着くのは……――

チャコがやけに含みを持たせ勿体ぶるように間を空けた。

――えつ何！ 何かすごいハコがあるの？――

レイは小さな子どものように好奇心満々で眼をキラキラさせながら妙に得意げな表情のチャコに質問をぶつけた。

――なんてトコだと思う？――

チャコはいたずらっ子っぽい笑顔を浮かべながら、レイへの答えをじらせた。

――そんな事わかるわけないじゃん。クイズじゃないんだから早く教えてよ。――

仕方ないなあ、これだから素人は困っちゃうよね……と、言わんばかりの嘲笑するような

表情を浮かべた後、その偉大なるハコの名前を一字ごとに区切るように力強く発音した。

――武・道・館！――

その名を発したチャコはやけに得意げな表情を浮かべながら鼻からフフンと息を漏らした。

――武道館？！ 何言つてんの、武道館はこつちの世界にあるトコじゃん。 ばつかじやない？――

レイはからかわれた事にちょっとイラつとして、眉間に軽く皺を寄せながらチャコに突っかかった。

チャコはやれやれという感じで、ため息をつきながら顔を横に振り、レイに教えるように落ち着いた口調で語った。

――あつちにあるんだよ、武道館が…… こつちの世界とあつちの世界はなんていうんだつけ、そうパラソルワールドって言う関係でさ――

――いやいや、それを言うならパラレルワールド――

オカルト用語に詳しいレイが間髪入れず、間違いを訂正した。

――あつそそう、そのパラレルワールドみたいな関係で結構世界観が重なつていいんだよ。 で、あつちの武道館もこつちと同じように音楽やつている幽霊達にとつちやすく述べ

な場所でね、みんなあそこを目標して頑張っているんだよ。 あそこで納得出来る演奏をして、来てくれたヤツらにイイ音を聴かせてやるためにね——

チャコがいつものダルそうな雰囲気では無い、いつになく真剣な眼差しでレイの眼をまつすぐに見つめながら話した。 レイをからかっている訳ではなさそうだ。

——へえー、そうなんだ。なんかすごいトコみたいな感じだけど幽霊の人たちにとつてどういう特別な意味があるの?——

——それは内緒。まあーそのうちわかる時も来るよ。——

チャコは少し寂しそうな笑顔でレイへの答えをはぐらかせた。

エピソード4 おばあちゃん?

チャコと共に草葉の陰の世界の事やその世界での音楽事情なんかを軽く話しながら街の中をブラブラするレイ。 まあ、メンバー探しはそんなに急ぐことでもないからぼちぼちやれば良いのだが、あてもなくブラブラしていくもラチがあかない。 レイはいい加減歩き疲れてきたこともあり、こう切り出した。

——ねえチャコ、なんかさあもつと効率的にメンバー探す方法つてないの? 募集するとか、誰かの紹介とかさあ——

のほほんと街の風景を流し見しながら機嫌良さそうな表情で歩いていたチャコは、たった今メンバー探しをしていた事を思い出したような様子だつた。今までしていたことをすぐ忘れて他のことに没頭するところはいかにも猫らしい習性だ。

——そ、そうだね。レイの言う通り。じゃあ、駆け出しバンドがよく集まるようなちつちや

いハコに行つてみようか？ あそこならメンバー探しもしやすそうだからね。――

――そんなのがあるのならさつさんと言つてよ――と言つ葉が喉元まで出かかつたけど、まあ行き当たりばつたり的な性格のチャコにそんなこと言つても仕方ない。そう、そもそも猫なのだから。

――でもチャコ、そこつてどうやつていくの？ 私にも入れるところなの？――

散々歩き回つてここからえらく離れた場所に連れて行かれて、そのあげく生きている人間は入場お断り申し上げます……なんて言われたら堪つたものじやない。レイは予防線を張るつもりでチャコに訊ねた。

――ああ、心配ないよ。 このお札があればどこもかしこも自由に入りたい放題。 じゃあ、行こうか？――

チャコはそう言いながら、レイに草葉の陰の世界を見せるために使つた例のお札をまた同じようにポケットからクシャクシャな状態で一枚取り出し、適当に皺を伸ばしてそばに立つ電柱に貼り付けた。――

どうやらチャコはこのお札を何枚も持つているらしい。

――そんなところに貼り付けてどうするの？――

レイはごく単純な質問をチャコに投げかけた瞬間、電柱に貼り付けたお札がまばゆい光で燃え上がり、そこに何やら重々しく頑丈そうな鉄で出来たドアが現れた。

街中に立つ何気ない電柱の前に突然扉が現れたと言うのに道ゆく人々は全くの無反応だつた。このありえない現象が全く見えていないらしい。

――な、何これ！？ チャコこれどうなつているの！？――

――何つてこれがそのライブハウスの入り口じゃん。――

チャコは軽い笑みと少し呆れたような表情が混じつた顔で軽くいいのけた。

その扉はやや青みがかつた真つ黒な鉄で出来ており、扉には赤ペンキによる手書きでこう書かれていた。

『HEAVEN'S HELL'S GATE』

『HEAVEN'S』の文字が荒々しく横線で書き消され『HELL'S』に訂正されていた。重々しい扉から漂う邪悪な気配と共に、このライブハウスの名前であろうと思われるペンキの文字が、この場所がいかにもヤバイ場所であるかを暗黙のうちに物語つていた。

――さ、入ろうか？――

全く物怖じせず、ファストフード店かコンビニにでも入店するかのような軽い足取りでチャ

コが太い鉄パイプで出来たドアの取手に手を掛けた。

——ちよ、ちょっと待つて！　ここ大丈夫なの？　私、無事に帰れるの！？　——

レイは怯えた表情を浮かべ、少し汗ばんだ両手で取手を押し、ドアを開けようとするチャコの動きを阻止するように押さえた。

オカルト好きのくせに怖がりのレイの動物的本能が、この突如現れた不気味なドアに入るという行為に激しくレッドアラートを鳴り響かせていた。ドアの向こうに広がっていると思われるヤバそうな雰囲気を想像するだけで手が震え、足がすくんだ。ドアの向こうにとんでもなくタチの悪い悪霊とか怨霊とかがいて、取り憑かれたり魂抜かれたりしたらどうしよう……。そんな不安で心臓はバクバク音を立てて、額にはじわりと汗が浮かんだ。バンドメンバーを探すという目的は遙か彼方に吹っ飛び、今は怯えと不安で頭が一杯になっていた。

——あ、にビビってんの。大丈夫だつて、そんなに怖いところじゃないから。そりやたまにはややこしいのがいる時もあるけど、そんな事は滅多にないし、そんなやつがいたらセキュリティが叩き出すから安心して。　——

チャコはうつすらと涙目になつているレイが安心できるよう、チャコなりに精一杯の言葉を掛け不安を取り除こうとした。



——本当！？ 本当に大丈夫なんだよね！？ 嘘ついたらカツオブシご飯もう作つてあげないからね！ ちりめんじやこも無しからね！ ——

レイは自分でも一体何を言つているのだと思ひながらチャコに念を押すようにしつこく確認した。

——大丈夫、大丈夫。 さあ、行くよ。——

そう一言告げてチャコは扉の取手を両腕で押しドアを開けた。
目の前の鋼鉄のドアがゴゴゴゴ……と重々しい音を響かせながら開くと同時に眩しい光と轟音がレイの目と耳に怒涛のごとく降り注いだ。

眩しい光に目が眩んでいたレイがゆっくりと目を開けると、目の前の光景はライブハウスのロビーだった。その奥にステージがあり見知らぬバンドが大勢の客を前にし、大音量で激しい演奏を披露していた。ロビーとフロアを隔てているドアが開け放しなので入口から入つたとたんに音と光の洪水に襲われたらしい。

ステージに立つバンドのメンバーはよく見ると、いやよく見なくとも明らかに生きている人間ではなかつた。真っ青な肌と所々に滲む血液らしき赤黒いシミ、おまけに体のあちこちにかじられたあとのような欠損が見られた。

そう、そのバンドはメンバー全員がゾンビで構成されていた。レイは恐怖のあまりフツと気が遠くなり意識が飛びそうになつた。

「ちよつと、ちよつと、レイ！ 大丈夫？」

チャコが慌てて体を抱きかかえ今にもフロアに倒れてしまいそうなレイを支えた。レイは失神こそしていらないものの歯をガチガチ鳴らせてかなり怯えている様子だつた。

「チャコ！ あんなのがいるんなら前もつて何か言つといてよ！ いくらなんでも怖すぎるだろ！」

震える体から渾身の声を振り絞り大音量の音楽が鳴り響く中チャコに抗議した。

——くつそ、二度とカツオブシご飯なんかつくつてやるもんか！——

レイは心中で叫んだ。

「ははは、ごめん、ごめん、こっちの世界の事はレイならある程度は想像できてるかな……なんて思つてたんだけど。いきなりはショックが大きかつたみたいだね？」

チャコは詫びるような引きつった笑顔を浮かべ謝罪した。

「ぞうけんなよ！ 心臓止まるかと思つたよ！」

レイはチャコの胸ぐらを両手で掴みながら涙目で收まらない怒りを再びぶつけた。

「まあ。まあ落ち着いて、周りをよく見てよ、いろんなのがいるだろ？ ゾンビ、普通の幽霊、ガイコツ、なんかよくわかんないけど半分透き通つたやつとか…… これがこつちの世界だよ」 チャコに言われて周りをゆっくり眺めると、チャコの言う通り、ゾンビどころの騒ぎじゃなく、幽霊やら、ガイコツやら、なんか人型の煙みたいなやつとか様々な人々？……いや人々と呼んでいいかわからない大勢の客がゾンビバンドの奏でる音楽に合わせて体を揺らし、拳を振り上げ熱狂していた。

「いろいろ見かけは違うし、レイからすれば怖くて戸惑うかもしれないけどみんな音楽好きなだけのやつらだから大丈夫だよ。取つて食おうなんてことしないから安心して」

チャコはレイを落ち着かせるようにいつもと比べてゆっくりと落ち着いた口調で説明した。 チャコの説明を聞いて少し落ち着きを取り戻したレイは、さつきから自分が普通に口をパクパクさせてチャコと会話していることにふと気がついた。

「ねえチャコ、さつきからあたし普通に口で喋ってるんだけど、ここなら別にテレパシーとか面倒くさいことしなくてもいいんだよね？」

多分、問題は無いのだろうなと思いつつレイは肯定的な答えが欲しくてチャコに質問した。

「さつきこのドア通つただろ？ あのドアからこつちは元いた世界とは別世界。 あたしら一

人とも周りからちゃんと見えているからレイが独り言言つているようには見えないよ。」

期待する答えが返ってきたレイはホッとすると同時に、テレパシーという馴染まないコミュニケーション方法をここでは取らなくていいことで少し気分的に楽になつた。毎回毎回話しかける度に頭で考えたセリフを投げかけるなんて肩が凝つて仕方がない。

目の前のステージでは先ほど演奏をしていたゾンビバンドが演奏を終え、聴衆からの声援に応えながらステージの脇から控え室に帰つて行くところだった。

「ねえ、ここつて今日ほどのくらいのバンドが出るの？」

先ほどのゾンビバンドはなかなかハードな音楽スタイルで格好良かったが、他にもいろいろなバンドが出演するのならもつともつと聴いてみたいとレイは思った。

「うーん、数はわかんない。 だつてこれ、永遠に終わらないからね」

永遠？—— レイにはチャコの言つている意味がすぐには理解できなかつた。

「え、二十四時間営業、年中無休つてこと？」

「そう、元いた世界では一日二十四時間で区切りつていうものがあるけど、こつちにはそういうのが一切無いからノンストップでずっとやつてるよ。 出演バンドもこのハコならオーディション無しでエントリーさえすれば誰だつて出られるから駆け出しバンドが腐るほど集まつて

くるし」

腐るほどいる駆け出しバンドによる永遠に繰り広げられる演奏—— わくわくすると同時にレイはこんな数多くのバンドの中で自分が歌つているバンドが聴衆に受け入れられ、記憶に留めてもらえるのだろうかと不安になつた。

ステージにはメンバー全員が包帯で身をグルグル巻きに包んだミイラのバンドが演奏の準備をしていた。先ほどのゾンビと違い、体の見えている部分が殆どない分レイには少しだけ怖さがマイルドだつたが、ボーカルミイラの赤く光つている眼が底知れぬ不気味さを醸し出していた。

このバンドは一体どんな曲を演奏するのだろう—— レイは初めて目にするミイラバンドに期待を膨らませてステージを眺めている時、突如、演奏前の静寂を破る声が響いた。

「おい！ チャコじゃねえか！？ てめえこの前はオレのメシ横からつまみ食いしやがつて！」

レイとチャコの背後から野太いダミ声が響き、チャコの全身にビクツと緊張が走つたのが、少し逆立つた毛から見て取れた。

「や、やあガス！ 久しぶり！ 元気だつた！？」

チャコが少し怯えた声で精一杯の空元氣を振り絞つて応えた。

チャコに話しかけたのは袖のない革ジャンに身を包んだ身長二メートル近いオスのネコだった。歴戦の喧嘩の証なのか、片方の耳は一部食いちぎられたような欠損があり、右の目は大きな切り傷で潰れていた。筋肉だらけのがっしりしたガタイも至る所古傷だらけだった。喧嘩についてはそうとう場数を踏んでいるらしい。

「てめえ、俺の飼い主が供えてくれた魚返しやがれ！」

「ご、ごめん。そ、その件についてはまたこんどゆっくりとお話をしようじやないの？ いかがかな？」

チャコがヒクヒクと引きつった笑顔でガスの怒りをなだめるように慎重に応えた。

「ちょ、ちょっとチャコ、あんたこのでつかい猫さんに何したのよ？」

レイがひそひそ声でチャコに話しかけた。

「いやそのね、ガスの元飼い主がガスのお墓にお供えした焼き魚が非常に何といふかおいしそうだつたのでついついその、なんといいますか……？」

「ま、まさかあんた、盗んだの？」

レイがチャコの話を遮るように間髪入れず質問した。

「はい、ほんの出来心で——あっちで供えてもらつたご飯つて、こっちに持つて来られるんだけど、まさかあれがガスの飼い主さんのお供えした魚とはつゆしら—— おいしくいただきました。 今では反省しております」

「バカっ！ とんでもないことして！ ちゃんとガスさんに謝りなよ！」

二人のやりとりを込み上げる怒りを抑えながら聞いていたガスがレイに迫力いっぱいのドスの聞いた声で話しかけた。

「ネエちゃん何モンだ！？ 関係ねえヤツはすつこんでな！」

あまりの迫力にレイは今にも失神しそうだつた。さつきのゾンビバンドの怖きどころではない。

「あ、あたしはチャコの飼い主……つていうか、チャコ死んじゃつたから元飼い主か？……チャコがあなたのお魚食べちゃつたみたいで本当にごめんなさい。 あたしからも謝ります。 許してやつてください」

ガスのド迫力にビビりながらもレイは震える声で謝罪した。

「うるせえ、てめえが謝つても腹の足しにはなんねえんだよ！ そこで黙つてな！ で、チャコ、この落とし前はどうつけてくれるつてんだコラ！？」



ガスの声がさらに迫力を増し、周囲にも緊張が伝わったのか他の客たちも雑談をやめ、シンと静まり返り始めた。

「さあ～、どうするんだテメエ～」

ガスの頬の筋肉がピクピクと動き、今にもチャコに飛びかかり、強く握られた拳を一発お見舞いしそうだつた。

「本当にごめんなさい！うちのチャコが迷惑かけちやつて、許してあげて！」

レイがチャコをかばうように前に立ち塞がり大きな声で謝罪した。

その謝罪の言葉が終わるや否やガスが拳を振り上げレイ達に襲い掛かつた！

「えちやごちやうるせえんだよ！」

もう、ダメだ！―― やっぱりこんなところ来なきやよかつた――

そう思い目を強く閉じた瞬間、フロアの少し離れたところから少し低めの女の声が響いた。

「おい、ちょっと待ちな！」

他の客たちはその声のする方へ視線を向けた。そこには長身で青い髪をした美しい女が煙草を吸いながら飲みかけの酒の入ったグラスを持つて立つていた。

スレンダーなモデル体型を白のタイトなワンピースで身を包んだその女はゴツいエンジニア



ブーツを履いた足で静かに、そして流れるようにガスの方に歩き出した。グラスに入った氷がカラカラと音を立て、静まり返ったフロアに響く。周りの客たちは徐々にその女の前から後ずさり、女とガスの間に道が開けた。

その女はレイとチャコのそばに来ると少し立ち止まり、彼女達を一瞥したあと、煙草の煙をゆっくり吐き出し——「だから心配だつたんだよ、クソツ」と、小さい声でつぶやき、再びガスのほうに歩き出した。

「なあ～ガス、ここは一つアタシの顔に免じて勘弁してやつてくれねえ～かな？　あんたのご馳走は後でこいつらに何とかさせるからさあ」

今まで込み上げる怒りで周囲を震え上がらせるほどのド迫力だつたガスがすっかり沈静化し、その美しい女の前に佇んでいた。

「あ、アンタがそう言うのなら仕方ねえ、チャ、チャコ次はねえからな、覚悟しとけ！」

ガスはそう告げると巨体で風を切りながら開きっぱなしのロビーへ通ずるドアを通り、ライブハウスの出口へ向かつて歩いた。

「すまねえな、近いうちにうちのヤツをあんたのところに寄越すからちょっと待つてくれ」

その女は出口のドアに手を掛けたガスの背中に声を掛けた。



「さあーて、あんたたち、とりあえずこっちに顔貸しな」

女はそう言つてロビーへと向かうドアを額先で指し示した。

「は、はい！」

レイとチャコは声を揃えていつもよりかなり甲高い声で返事した。

女は青い髪をなびかせ、先ほどと同じように右手に煙草、左手にグラスを持ち、ゆっくりとロビーの奥にあるドアに向かつて歩き始めた。レイとチャコは緊張しながら黙つて女の後に背中を丸めてチョコチョコとついて行つた。

「入んな」

女はSTAFF ONLYと書かれたドアを開け、落ち着いた声でそう言つた。

中には三人掛けのソファ、一人掛けのソファがそれぞれ2脚ずつ、中央のガラステーブルを囲むように置かれ、部屋の隅に佇む事務机の上の灰皿はタバコの吸い殻が山盛りになつていた。壁にはこつちの世界のいろんなバンドのポスター所狭しと貼つてあり、すっかり色あせているポスターもあつた。かなり以前に貼られたものであろう。

「汚ねえどこだけどさ、まあー好きなところに座んな」

女は吸い殻が山盛りになつた灰皿で煙草の火を消しながら彼女達に告げた。

「さ、先ほどはありがとうございましたっ！」

レイが席に着く前に緊張した大きな声で女に礼を言つた。

「ほら、チャコもお礼言いなよ！」

レイが肘で軽くチャコの脇を小突きながら小声で囁いた。

「あ、ありがとうございました、リアさん！」

チャコが甲高い大きな声でお礼の言葉を張り上げた。

——リアさん？ チャコはこの人の事を知つてゐるのか——

「いいよ、大した事じや無い。 だけだガスにはちゃんとご馳走用意して詫び入れときなよ。おまえならやり方わかるだろ？」

チャコがリアと呼んだその女は新しいタバコにジッポライターで火を点けながら、三人掛けのソファにドカッと腰を下ろすと同時にチャコに鋭い視線を投げかけた。

さつきのガスとかいうでつかい猫も迫力があつたけど、このリアという女の眼力もかなりの凄みがあつた。ただ、ガスのそれが燃えるような熱いものであるのに対し、彼女の眼は見るものの全てを凍りつかせるような背筋のゾクゾクする冷たいものだつた。そんじよそこらのチンピラなら縮み上がつてしまいそうだ。

「は、はい！ わかりました！」

いつもフニャフニヤして、何事にもいい加減なチャコがリアの前では文字通り借りてきた猫
というかなんというか、いわゆるいいコちゃんになっていた。

「まあ～さつきも言つたんだけど、一人とも力チコチに突つ立つてないで座んなよ」

「はい！」

レイとチャコはリアの向かい側にある三人掛けのソファに、背もたれに背中をつけずにお行儀
よく腰掛けた。

「で、とりあえずあんたは私のこと知らないみたいだから自己紹介するけどさ、あたしはここ
のオーナーのリアってんだ。 よろしくな」

リアはレイにごく簡単に自己紹介すると、フーッと一息煙草の煙を吐き出した。
「よ、よろしくお願ひします！ 私は……」

そこまでレイが話したところでリアが突然その言葉を遮った。

「レイだろ？ 知つてるよ」

――は？ なんでリアさんが私の名前知つてるの？ え？ 何？――
「あの～、どこかでお会いしましたっけ？」



レイはそんなありえない質問をリアに投げかけた。初めてこっちの世界に来たレイがリアにどこかであつてはいるはずがないのだ。レイは緊張のあまり自分が変な質問をしたことすらわかつていなかつた。となりにいるチャコもなぜリアがレイの事を知つてゐるのか不思議に思つたようで、ポカンとした表情を浮かべながら先ほどと同じように姿勢正しく座つていた。

「フフツ、まあ～会つたことはないんだけどね。 縁あつてこっちからはあんたの事ずっと見てたよ」

「え？ 見てたつて……縁つて……ど、どう言う事ですか？」

レイがきょとんとした顔でリアを見つめた。チャコも何が何やら訳がわからない感じで眼をパチパチさせていた。

「まあ～隠すことでもないから言っちゃうけどさ、あたしあんたの遠いご先祖にあたるんだよね。何代ぐらい前かはつきりしたことは覚えてないけどね」

「えーっ！ あたしのご先祖さま！ すごい！ ……ってことはあたしのおばあちゃん！？」

レイがそう言つた瞬間、レイの視界には光り輝く星がフラッシュし、脳天に激痛が貫いた。激痛が少し引いて、頭を抱えながら視線を上げると、そこには拳を握りしめたりアが重々し空氣をまとい、一段とすごい冷氣をその視線から発し立つっていた。レイはゾクゾクする冷氣と恐

怖のあまり今にも凍つてしまいそうだつた。

「今度、おばあちゃんて呼んだらブチ殺すよ。おぼえといて」

リアが怒りで軽く声を震わせながらゆっくりとレイに警告した。

「は、はい……わかりました。ご、ごめんなさい」

レイは痛みを堪えながらリアに謝罪した。

となりにいたチャコはリアの怖さに加えて、リアがレイのご先祖さまという事実を目の前にして大きな口を開けたまま啞然としていた。

「まあ、なんだ、とにかく遠い先祖だから、それとなく子孫のレイのことが心配でちょこちょこ見てたんだけどさあー、どこぞの化け猫が、事もあるうに、こっちの世界にレイを連れて来ちゃつてさあー……」

リアは煙を吐き出しながら今までレイに注いでいた、凍てつくような視線をチャコに投げかけた。

チャコはその視線を受けてビクッと反応し、全身の毛が一瞬逆立ち、しっぽの太さも一瞬倍ぐらいに膨れ上がつた。

「ご、ごめんなさい！ すいません！ ど、どうしてもレイとバンドやつてみたかったからつ

い連れて来ちゃいましたっ！」

チャコが半泣き状態で立ち上がり、リアに向かって深々と頭を下げた。いつものチャコからしたら想像できないような礼儀正しさだ。

「もういいよ、連れて来ちましたものはしようがないし、ただ、これ以上ややこしいことにレイを巻き込むんじゃないよ。もしあたしの子孫に何かあつたらあんたもただじや済まないからね。そのところはきつちりと覚えといて」

リアは先ほどの淒みのある視線をほんの少し和らげチャコに注意を促した。

「はい、わかりました！」

チャコは先ほどと変わらずありえない礼儀正しさだ。

「つてことで、あんたらメンバー探してんだろ。とりあえず、あたしをドラムにしな。これはご先祖さまからの命令だよ。拒否は認めないからね」

「えっ！ おば——リアさんがドラムやつてくれるんですか！？」

レイは当然の申し出に少し興奮し、思わずおばあちゃんと呼んでしまうところだった。

「あんたら見ると危なつかしいからね。ドラムなら昔やつてたし、レイがボーカルやるつてんならステージで後ろから見てられるしね」

「ありがとうございます。ご先祖さま」

レイは立ち上がり深々と頭を下げた。チャコもつられて、一緒に頭を下げた。

「ご先祖さまは堅つ苦しいからリアでいいよ。これからはおなじバンドのメンバーなんだからね。チャコ、お前もそう呼んでくれていいよ」

すっかり表情を和らげたリアが少し笑みを浮かべながら二人に告げた。笑顔を浮かべたリアはまさにクールビューティーといった感じで、女であるレイも憧れてしまいそうなオーラをまとっていた。女子校ならバレンタインにチャコレートを山ほど貰えそうだ。

「じゃ、じゃあ、リア、ついでと言つては何ですけど、他のメンバーつてどこかにあては無いですか？ どうやつて探したらいいのか全然わからなくて……」

リアがここの大オーナーなら音楽活動している幽霊達には顔が広いはずだから、きっとバンドに入ってくれるメンバーが見つかるはず——レイはそう思った。

「あと、必要なのはギターとキーボードなんですけど」

チャコが少し身を乗り出してたたみかけるようにリアに告げた。

「そうだね、キーボードなら上手いくせに、いつもブラブラとヒマそうにしているのが一人いるな。あと、ギターはあたしが無茶苦茶になつてているやつがいるんだけど、そいつが、その、

ちよつと面倒なやつでさあ。まあ、会つてみればわかると思うけど……、まあとにかく先にキーボードに当たつてみるか？ 今どこにいるのか全くわかんないから見つけたら連絡してやるよ。そん時がきたらまたここに来な」

こんなに順調にメンバー候補が見つかると思つていなかつたレイは、心が高揚していた。

リアはちよつと怖い人だけど、血の繋がつたご先祖で、しかもライブハウスのオーナーというのが実に心強い。チヤコもしつぽが、ピンと立つて心なしか浮かれているように見える。

まずはキーボード、どんなメンバーと巡り会えるんだろう——レイは自分が歌えるロツクバンドの誕生にこれまで以上に期待を膨らませた。